

日本語諸方言の音調体系の定式化（4）

岡田 英俊

0 序

本稿は、岡田(1992)に続いて、日本語諸方言の音調体系の定式化を行う。取り上げる方言は、次のとおりである。

- §1 白峰方言（石川県石川郡白峰村）
- §2 観音寺方言（香川県観音寺市）
- §3 津幡方言（石川県河北郡津幡町）
- §4 戸入方言（岐阜県揖斐郡旧徳山村）
- §5 島別所方言（石川県鹿島郡能登島町）
- §6 中村方言（島根県隠岐郡西郷町）
- §7 伊後方言（島根県隠岐郡西郷町）

上記の各節のほか、§8 を設ける。§8 において、プログラミング言語 Scheme による定式化を示す。

§8 以外の各節 §*n* は、次の2つの部分から成る。

§*n*.1 データ、§*n*.2 分析。

各 §*n*.2 で示す「分析」は、直観的な記述である。厳密な記述は、すべて、§8 に委ねる。岡田(1990,1991)と同じく、各方言の音調体系のデータ、及び、その基本的な捉え方は、すべて、先行する諸論考に負っている。独自の調査は、一切、実施していない。

なお、今回取り上げる7つの方言は、何らかの明確な基準に基づいて選択したものではない。しかし、概ね、式の音調に特色があると考えられる方言を、選択した。

1 白峰方言

1.1 データ

§1～§3 で扱うのは、いわゆる下降式の存在する方言である。まず、この §1 において、

白峰方言（石川県石川郡白峰村）を扱う。

白峰方言のデータと、その基本的な捉え方は、上野善道(1988: 41-43, 1989a: 24-25)による。そこに示されている解釈は、同(1984: 358-359)の解釈に代わるものである。この旧解釈については、特に触れない。新田哲夫(1985)の示す解釈も、すでに成立しなくなっていると考えられるので、やはり、触れない。

素性T, Iの値を、次のように定める。

1 T: 下降式, 2 T: 平進式,

+I: 句頭, -I: 非句頭。

一般に、本稿において、「下降式」「平進式」などの、式の名称は、依拠した論考のものを、そのまま用いる。前稿までと同じく、これらの名称は、本稿の中では、ラベルとしての役割を担うに過ぎない。

上野善道(1988: 41-42)に基づいて、下記に、データを挙げる。音調を示す記号は、上線式に改めた。かつ、データの配列様式は、独自に設定した。この2点については、本稿の責任である。また、岡田(1990, 1991)と同じく、参照の便宜上、素性の値を付記する。これは、厳密には、「分析」に属する行為である。これらの点は、他の方言についても、同様である。

以下に挙げるのは、句頭(+I)のときの音調である。カー=蚊, テー=手, カタ=肩, ヒー=日, ハナ=花, である。

[1 T, -acc]/+I

カー カゼ サカナ アサガオ アイダガラ ヨメイリサキ

[1 T, +acc]/+I

ハキソージ ネリハミガキ [3 M]

オトコオヤ ウワサバナシ [4 M]

カナキリゴエ [5 M]

[2 T, -acc]/+I

テー カタ ウサギ ハリガネ オトシダマ カカワリアイ

[2 T, +acc]/+I

ヒー ハナ ムスメ ネーサン シアサッテ ウジガミサマ [1 M]

オトナ クチビル カタグルマ ミズショーバイ [2 M]

ムラサキ ウミポーズ アクテンコー [3 M]

ウンテンシュ ヤサイバタケ [4 M]

ワラブキヤネ [5 M]

新田哲夫(1985: 左98-99)に従い、「蚊」「手」「日」は、2モーラ語とみなす。したがっ

で、上記においては、2モーラ語を、重複して提示していることになる。

下降式([1 T])の第1モーラの音調は、上記に挙げたデータでは、4モーラ以下のときに「中」、5モーラ以上のときに「低」となっている。しかし、この「中」と「低」の間には、「はっきりした線が引けるわけではない」という(上野善道(1988:42)参照。なお、「カー」「アイダガラ」の第1モーラの「高」は、第2モーラが「弱」であることによる。これについても、同所を参照)。実際、上野善道(1989a:25)は、5モーラ以上の場合も、「中」で表示している。

そこで、定式化する際には、このモーラを、すべて、「中」とみなすことにする。もちろん、必要ならば、「中」と「低」を区別する方針で定式化することも、容易である。

白峰方言を含め、本稿で取り上げる方言については、「弱」のモーラによる音調の変異の扱いを、便宜上、すべて省略する(ただし、津幡方言については、この限りでない)。前記のデータの中には、この、音調の変異の生じているものが、存在する。すでに触れた「カー」「アイダガラ」のほか、「テー」「ウンテンシュ」の音調が、これに該当する。

以上のことを踏まえて、定式化を行うための直接のデータとなる音調体系を、改めて提示する。

[1 T, -acc]/+I

○○̄ ○○○̄ ○○○○̄ ○○○○○̄ ○○○○○○̄

[1 T, +acc]/+I

○○○○○̄ ○○○○○○̄ [3 M]

○○○○○̄ ○○○○○○̄ [4 M]

○○○○○○̄ [5 M]

[2 T, -acc]/+I

○○̄ ○○○̄ ○○○○̄ ○○○○○̄ ○○○○○○̄

[2 T, +acc]/+I

○○̄ ○○○̄ ○○○○̄ ○○○○○̄ ○○○○○○̄ [1 M]

○○○○̄ ○○○○○̄ ○○○○○○̄ ○○○○○○○̄ [2 M]

○○○○○○̄ ○○○○○○○̄ ○○○○○○○○̄ [3 M]

○○○○○○○̄ ○○○○○○○○̄ [4 M]

○○○○○○○○̄ [5 M]

非句頭のときは、下降式・平進式とも、高く始まる。非句頭のときの音調の例を、上野善道(1988:41)の表7に基づき、「無い」(平進式無核型)に続く形によって、挙げる。助詞「ガ」(無標)の付いたときの音調の提示を兼ねる。「無い朝顔が」等が、それぞれ、1つのアクセント句を成す。

ナイアサガオガ
ナイハリガネガ
ナイネーサンガ
ナイクチビルガ
ナイムラサキガ

なお、下降式無核型の名詞に有標の付属語が接続すると、通常の下降式の音調とは若干異なった音調になる（新田哲夫(1985：左105-107)参照）。下降式（無核型）の動詞の連体形に、形式名詞の「トキ」（第1モーラにアクセント標識が存在）などが接続する場合も、同様である（上野善道(1988：43)参照）。

この現象は、音調体系全体の解釈には、影響を与えないと考えられる。よって、これについては、立ち入らない。定式化の対象にも、含めない。

1.2 分 析

音調パターンの縮約の状況を中心にして、句頭の音調に関し、直観的な解説を行う。非句頭の音調については、句頭の音調から容易に類推できるので、特に解説しない。

なお、以下で用いる「基本的な音調パターン」という概念は、本稿の枠組みにおける正式の概念ではない。直観的な理解を助けるためのものに過ぎない。

下降式無核型（[1 T, -acc]）の基本的な音調パターンは、「中高中…」である。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第2モーラと第3モーラを圧縮し、さらに、この圧縮によってできた末尾の「高→中」を、表層規則で「高→低」に変えることによって、得られる。

下降式有核型（[1 T, +acc]）の基本的な音調パターンは、「中高中…中低…」である。最後の「中」のモーラに、アクセント標識が存在する。縮約の適用はない。

平進式無核型（[2 T, -acc]）の基本的な音調パターンは、「低高…」である。縮約の適用はない。

平進式有核型（[2 T, +acc]）の基本的な音調パターンは、「低高…高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。第1モーラにアクセント標識が存在するパターン（[1 M]）は、第2モーラにアクセント標識が存在するパターン（[2 M]）の第1モーラの除去によって得られる。

2 観音寺方言

2.1 データ

次に、観音寺方言（香川県観音寺市）を扱う。データと、その基本的な捉え方は、上野善道(1985: 238-240, 1988: 38-39)に基づく。

素性Tの値を、次のように定める。

1 T: 下降式, 2 T: 低接式.

上野善道(1988: 38)の表4に基づいて、データを挙げる。ただし、長音化の有無については、省略する。また、下記に挙げる音調のみを、定式化の対象とする。下記以外の、音調の細部（必ずしも「細部」とは言えない場合もある）についての考察は、行わない（これについては、§2.2の末尾も参照）。

[1 T, -acc]

蚊 カゼ サクラ カミナリ カミナリガ

[1 T, +acc]

葉 イシ ケヌキ アサガオ アサガオガ [1 M]
カネモチ カネモチガ [3 M]

[2 T, -acc]

手 フネ スズメ ニワトリ ニワトリガ

[2 T, +acc]

ナベ カブト ムラサキ ムラサキガ [2 M]
ノコギリ ノコギリガ [3 M]

2.2 分析

下降式無核型（[1 T, -acc]）の基本的な音調パターンは、「高高中…」である。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第2モーラの除去によって得られる。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの圧縮によって得られる。

下降式有核型（[1 T, +acc]）の基本的な音調パターンは、「高高中…中低…」である。最後の「中」のモーラに、アクセント標識が存在する。

この場合、第1モーラにアクセント標識が存在するパターン（[1 M]）の算出が、問題となる。この型の音調を導くに際しては、明らかに、縮約を加えなければならない。とこ

ろが、本稿の枠組みにおいて、[1 M] の音調は、[2 M] の音調から導かなければならない。[3 M] の音調から直接に [1 M] の音調を導くような操作は、存在しない。しかし、[1 T] には、[2 M] の型が存在しない。よって、このままでは、[1 M] の音調を導くことができない。

そこで、実在しない [1 T, 2 M] の型を、仮想的な中間段階として、設定する。それを經由して、[3 M] の音調から [1 M] の音調を導くこととする。

仮想的な [2 M] の音調としては、「高高低…」を設定する。理論上可能な音調は、これ以外にも、いくつか存在する。しかし、比較的単純な音調に限定すると、候補となるのは、「高高低…」または「高中低…」である。ここでは、この2つのうち、「高高低…」を採用することとした。この決定に、特別の理由はない。「高中低…」を採用しても、定式化の上では、問題がない。

この仮想的な [2 M] のパターンは、非縮約形である。[1 M] のパターンは、[2 M] のパターンの第2モーラの除去によって得られる。

低接式無核型 ([2 T, -acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…」である。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの圧縮によって得られる。

低接式有核型 ([2 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。第 a モーラにアクセント標識が存在する a モーラのパターン ([a M, a N]) は、第 a モーラにアクセント標識が存在する ($a+1$) モーラのパターン ([a M, ($a+1$) N]) の末尾のモーラと末尾から2番目のモーラの圧縮によって得られる。

なお、観音寺方言、並びに、それと類似した音調体系を有する、新居浜方言（愛媛県新居浜市）、及び、三野町方言（香川県三豊郡三野町大見）については、音調の実質やその解釈に関して、諸論考により、詳細な考察がなされている（新居浜方言については、中井幸比古(1984: 110-116)、三野町方言については、佐藤栄作(1986)を参照。また、この3方言に関して、上野善道(1988: 38-41)、中井幸比古(1990: 52-56)を参照）。しかし、本稿は、音調体系の単純な定式化のみを目的としているため、この種の詳細な考察には、立ち入らない。

3 津幡方言

3.1 データ

次に、津幡方言（石川県河北郡津幡町）を扱う。データと、その基本的な捉え方は、新田哲夫(1988: 06-08)、上野善道(1988: 43-45)による。なお、ここで言う「津幡方言」と

は、新田哲夫(1988)の「津幡中央タイプ」を指す。

素性T, T'の値を、次のように定める。

1 T: 下降式, 2 T: 平進式,

1 T': 低発式, 2 T': 高発式.

新田哲夫(1988)は、「平進式」という名称を用いていない。この名称の使用は、上野善道(1988: 44)による。

また、新田哲夫(1988)も、上野善道(1988)も、「低発式」「高発式」という名称を用いていない。この名称は、金沢方言との類似に基づき、本稿の責任で、使用する(金沢方言の「低発式」「高発式」については、上野善道・新田哲夫(1983)、岡田(1991: 191-197)を参照)。

低発式・高発式の現れる条件は、新田哲夫(1988: 07)に示されている。金沢方言との類似についても、そこで触れられている。

データを挙げる。カタ=肩, ウミ=海, カミ=紙, である。

[1 T, -acc]

ウシ サカナ タベモノ カエリミチ カエリミチガ [1 T']

血 トリ クルマ エンピツ イイガカリ イイガカリガ [2 T']

[1 T, +acc]

ムシヨケ イシアタマ イシアタマガ [4 M, 1 T']

カイガラ カイガラガ ○○○○○○ [4 M, 2 T']

ヒケシツボ ヒケシツボガ [5 M, 1 T']

[2 T, -acc]

カタ ウサギ アオゾラ カクシゴト カクシゴトガ [1 T']

木 ウミ アブラ ニンギョー オーセツマ オーセツマガ [2 T']

[2 T, +acc]

名 カミ ナミダ アイサツ ミギヒダリ ミギヒダリガ [1 M, 2 T']

ヤマ アタマ サカズキ オカーサン オカーサンガ [2 M, 1 T']

ムスメ クチビル ウバグルマ ウバグルマガ [3 M, 1 T']

カンキリ アルコール アルコールガ [3 M, 2 T']

カタカケ アマヤドリ アマヤドリガ [4 M, 1 T']

キヌイト ミズタマリ ミズタマリガ [4 M, 2 T']

コマモノヤ コマモノヤガ [5 M, 1 T']

メリケンコ メリケンコガ [5 M, 2 T']

平進式で第1モーラまたは第2モーラにアクセント標識が存在するとき([2 T, +acc, 1 M] または [2 T, +acc, 2 M]), 新田哲夫(1988), 上野善道(1988)は, 低発式・高発式(に相当する区別)を指定していない。しかし, 上記においては, 常に, 低発式・高発式のいずれかを指定した。具体的には, [2 T, +acc, 1 M] を [2 T'] (高発式)とし, [2 T, +acc, 2 M] を [1 T'] (低発式)とした。

新田哲夫(1988: 06-08)は, 音調体系における「未確定部分」にも触れている。本稿では, 未確定部分のうち, 新田哲夫(1988: 08)が, 「調査項目を増やせば, 埋まるであろう」としている [1 T, 2 T', +acc, 4 M, 5 N] (下降式・高発式で第4モーラにアクセント標識が存在する5モーラ語)のみを, 存在する型とみなす。さきにデータを挙げた際には, この型の語例を, 対応する4モーラ語に助詞の「ガ」が付いた形(「カイガラガ」)によって, 補った。この型に「ガ」が付いた形は, 丸印で示した(「カイガラガ」の右隣)。

未確定部分に属するその他の型は, 存在しないものとみなす。ただし, 未確定部分に属する型の存否は, 定式化自体には, 影響を与えない。

3.2 分 析

高発式([2 T'])のパターンは, 変異規則の適用により, 対応する低発式([1 T'])のパターンから, 導かれる。これは, すべての場合に共通である。以下では, 特に問題がない限り, このことを繰り返さない。

この措置により, 以下で言う「基本的な音調パターン」は, 自動的に, 低発式のパターンを指すことになる。また, 縮約が直接に適用されるのは, 当然, すべて, 低発式のパターンである。

なお, 変異規則自体についての解説は, 省略する。

下降式無核型([1 T, -acc])の基本的な音調パターンは, 「低高中…」である。2モーラのパターンは, 3モーラのパターンの第2モーラと第3モーラの圧縮によって得られる。

1モーラのパターンの算出については, 問題がある。下降式無核型の1モーラのパターンには, 低発式が存在しない。しかし, 前記のとおり, 高発式のパターンは, 対応する低発式のパターンから導くこととしている。よって, このままでは, 高発式たる1モーラのパターンを導くことができない。

この問題については, 観音寺方言と同じ解決策(\$2.2参照)を取る。すなわち, 仮想的な中間段階を設ける。具体的には, 問題となっている高発式の型に対応する低発式の型を, 仮想的な型として設定し, その音調を, 「高→中」(1モーラ内における, 高から中への変動)と定める。この仮想的な1モーラのパターンは, 2モーラのパターンの第1モーラの除去によって得られる。変異規則の適用により, この型から, 高発式の1モーラの型が得

られる。

下降式有核型 ([1 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「低高中…中低…」である。最後の「中」のモーラに、アクセント標識が存在する。縮約の適用はない。

平進式無核型 ([2 T, -acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…」である。1モーラのパターンについては、上述の下降式無核型の場合と同じ問題が発生する。すなわち、低発式の型が存在しないため、このままでは、高発式たる1モーラのパターンを導くことができない。これについては、先程と同様の解決策を取ることとし、仮想的な1モーラの低発式の音調を、「低」と定める。このパターンは、非縮約形である。

平進式有核型 ([2 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。第1モーラにアクセント標識が存在するパターン([1 M])は、第2モーラにアクセント標識が存在するパターン([2 M])の第1モーラの除去によって得られる。また、第*a*モーラにアクセント標識が存在する*a*モーラのパターン([*a* M, *a* N])は、第*a*モーラにアクセント標識が存在する(*a*+1)モーラのパターン([*a* M, (*a*+1)N])の末尾のモーラと末尾から2番目のモーラの圧縮によって得られる。

4 戸入方言

4.1 データ

§4と§5で扱うのは、いわゆるくぼみ式の存在する方言である。まず、この§4において、戸入方言(岐阜県揖斐郡旧徳山村)を扱う。

戸入方言のデータは、山口幸洋(1984:59)による。音調体系の基本的な捉え方は、上野善道(1987:59-60, 1989a:25-26)による。

素性Tの値を、次のように定める。

1 T: 平進式, 2 T: くぼみ式。

データを挙げる。音調の表示方法は、上野善道(1989a:26)による。アメ=雨、である。

[1 T, -acc]

カゼ クルマ タナバタ オトコオヤ オトコオヤガ

[1 T, +acc]

ヤマ ナミダ アサガオ ダイドコロ ダイドコロガ [2 M]

ハナシ キタカゼ オームカシ オームカシガ [3 M]

カミナリ カエリガケ カエリガケガ [4 M]

アブラガミ アブラガミガ [5 M]

[2 T, -acc]

ア^メ ヒ^ダリ カ^ンザ^シ ム^ギバ^タケ ム^ギバ^タケ^ガ

[2 T, +acc]

ム^ラサ^キ ヤ^マザ^クラ ヤ^マザ^クラ^ガ [4 M]

モ^メン^イト モ^メン^イト^ガ [5 M]

山口幸洋(1984:59)は、1モーラ語については、1モーラの助詞の付いたときの音調のみを挙げている。「気」+助詞、「木」+助詞が、それぞれ、「風」、「雨」と同じ音調である。したがって、「気」、「木」に与えるべき素性構造は、それぞれ、[1 T, -acc] (平進式無核型)、[2 T, -acc] (くぼみ式無核型)となる。しかし、1モーラ語の単独のときの音調は、不明である。

4.2 分 析

平進式無核型 ([1 T, -acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…」である。縮約の適用はない。

平進式有核型 ([1 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。縮約の適用はない。

くぼみ式無核型 ([2 T, -acc]) の基本的な音調パターンは、「高高低…低高」である。3モーラのパターンは、4モーラのパターンの第2モーラの除去によって得られる。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第1モーラと第2モーラの圧縮によって得られる。

くぼみ式有核型 ([2 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「高高低…低高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。縮約の適用はない。

5 島別所方言

5.1 データ

次に、島別所方言(石川県鹿島郡能登島町)を扱う。データと、その基本的な捉え方は、新田哲夫(1990:82-83)による。

素性Tの値を、次のように定める。

1 T: 高進式, 2 T: くぼみ式.

データを挙げる。

[1 T, -acc]

蚊 タケ サカナ トモダチ モメント モメントガ

[1 T, +acc]

葉 カミ ナミダ シータケ オームカシ オームカシガ [1 M]

カワ コムギ イトマキ フコーヘー フコーヘーガ [2 M]

タマシー タケザイク タケザイクガ [3 M]

オトトシ ウデダメシ ウデダメシガ [4 M]

オトコオヤ オトコオヤガ [5 M]

[2 T, -acc]

木 カサ ネズミ ニグルマ ムギバタケ フルシンブン

[2 T, +acc]

アメ [2 M]

カブト センセー ○○○○○○ ダイダイイロ [3 M]

コガタナ ヤマザクラ ○○○○○○ [4 M]

チューゴクゴ カミフーセン [5 M]

○○○○○○○ [6 M]

新田哲夫(1990:82)の表2において、語例が丸印で表示されている型は、上記においても、丸印で表示した。

以下、新田哲夫(1990:82-83)の「共時的なコメント」を参照しつつ、説明を加える。以下の参照指示において、(ア)~(ケ)は、その「共時的なコメント」に付された記号を指す。

高進式([1 T])については、語音の条件によって、第1モーラから音調が「高」になる変異形が存在する((イ)参照)。しかし、本稿の一般的な方針に従い、この現象については、省略する。前記のデータは、すべて、非変異形である。以後も、非変異形のみを、分析の対象とする。

くぼみ式で第2モーラにアクセント標識が存在する2モーラ語([2 T, +acc, 2 M, 2 N]。語例「アメ」)の第1モーラは、長音化することがある。長音化したときの全体の音調は、「高低高」である。長音化しないときの音調は、「高低」である((エ)参照)。

長音化したときの音調は、くぼみ式で第3モーラにアクセント標識が存在する3モーラのパターン([2 T, +acc, 3 M, 3 N]。「カブト」と同じ型)の音調として、処理することができる。一方、長音化しないときの音調は、別個に処理する必要がある(例えば、長音化したパターンを基本にして、そこから長音化だけを取り除く、というようなことでは、処理できない)。そこで、[2 T, +acc, 2 M, 2 N]の音調としては、長音化しないときの音調の方を、データとして採用した。

高進式で第1モーラにアクセント標識が存在する型 ([1 T, +acc, 1 M]) の音調と、くぼみ式無核型 ([2 T, -acc]) の音調は、助詞を付けなくても、対立がある ((カ)参照)。本稿では、この程度の、音調の細部については、他の方言においても、考察を省略することとしている。ここでも、その方針に従う。必要ならば、この事実を定式化に組み込むことは、容易である。

くぼみ式 ([2 T]) のパターンの中の「高…」は、「低の続く句中」で消える ((ケ)参照)。新田氏に従って、下記に、例を挙げる。

| | | |
|-------------------------|---------------------------|----------------------------|
| $\overline{\text{コノ}}$ | $\overline{\text{コノカサ}}$ | $\overline{\text{コノアアメ}}$ |
| $\overline{\text{ナンノ}}$ | $\overline{\text{ナンノカサ}}$ | $\overline{\text{ナンノアアメ}}$ |

「コノ」は、高進式無核型 ([1 T, -acc]) である。「ナンノ」は、くぼみ式無核型 ([2 T, -acc]) である。「アアメ」は、新田氏の表記に従い、「アメ」の第1モーラが長音化したものを表す。「アアメ」は、すでに述べたとおり、本稿の見解では、くぼみ式で第3モーラにアクセント標識が存在する3モーラ語 ([2 T, +acc, 3 M, 3 N]) とみなす。「カサ」は、くぼみ式無核型 ([2 T, -acc]) である。

この音調は、初頭に「高…」の現れる音調から、容易に類推できる。以下においては、説明を省略する。定式化に際しては、便宜上、素性Iを使用し、「低の続く句中」を-Iで表し、その他の環境を+Iで表す。しかし、そもそも、この現象について、このように環境素性を用いることが適切かどうかは、今後、検討を要する。

高進式に関して、「コノ」の直後の音調 (新田哲夫(1990:82)の表2を参照) と、「コノ」が付かないときの音調 (さきにデータとして挙げたもの) の相違は、言わば、表層のレベルに属するものと考えられる。定式化に際しては、両者を、同一の音調とみなす。必要ならば、両者の違いを定式化に組み込むことは、容易である。

くぼみ式の語に付属語が接続したときの音調交替 (新田氏の「共時的なコメント」の(キ)を参照) については、省略する。音調体系全体の解釈に影響を及ぼすような現象ではないと考えられる。

その他、以上で触れなかった音調の細部は、定式化の対象としない。

5.2 分 析

高進式無核型 ([1 T, -acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…」である。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの第1モーラの除去によって得られる。

高進式有核型 ([1 T, +acc]) の基本的な音調パターンは、「低高…高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。第1モーラにアクセント標識が存在するパターン ([1 M]) は、第2モーラにアクセント標識が存在するパターン ([2 M])

の第1モーラの除去によって得られる。 a が1または2のとき、第 a モーラにアクセント標識が存在する a モーラのパターン($[a M, a N]$)は、第 a モーラにアクセント標識が存在する $(a+1)$ モーラのパターン($[a M, (a+1)N]$)の末尾のモーラと末尾から2番目のモーラの圧縮によって得られる。

くぼみ式無核型($[2 T, -acc]$)の基本的な音調パターンは、「高高低…」である。3モーラのパターンは、4モーラのパターンの第2モーラの除去によって得られる。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第3モーラの除去によって得られる。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの圧縮によって得られる。

くぼみ式有核型($[2 T, +acc]$)の基本的な音調パターンは、「高高低…低高低…」である。最後の「高」のモーラに、アクセント標識が存在する。第3モーラにアクセント標識が存在するパターン($[3 M]$)は、第4モーラにアクセント標識が存在するパターン($[4 M]$)の第2モーラの除去によって得られる。第2モーラにアクセント標識が存在するパターン($[2 M]$)は、第3モーラにアクセント標識が存在するパターン($[3 M]$)の第3モーラの除去によって得られる。

6 中村方言

6.1 データ

§6と§7において扱うのは、いわゆる3型アクセントの方言である。まず、この§6において、中村方言(島根県隠岐郡西郷町)を取り上げる。データと、その基本的な捉え方は、上野善道(1989b)による。

中村方言においては、2つ以上の文節が連続する場合、統語構造の違いや、プロミネンスの位置などの要素が介入して、複雑な音調交替が生ずる。これについては、上野善道(1989b)に、詳細な記述がある。しかし、本稿では、一般に、アクセント単位(ないし、文節など)を越える単位を、考察の対象としていない。よって、この音調交替も、以下では、扱わないこととする。また、そもそも、本稿の枠組みが、この音調交替について、特に新しい視点を提供することはない。

素性T, Fの値を、次のように定める。

1 T: A系列, 2 T: B系列, 3 T: C系列,

+F: 文末, -F: 非文末。

データを挙げる。上野善道(1989b:左2)による。アメ=雨, である。

[1 T]/+F

絵 アメ ウサギ ニワトリ ワタシブネ ワタシブネガ

[1 T]/-F

エガ アメガ ウサギガ ニワトリガ ワタシブネガ

[2 T]

柄 ヤマ ココロ アサガオ リコーモノ リコーモノガ

[3 T]

カゼ サカナ カネモチ タカラモノ タカラモノガ

C系列（[3 T]）の1モーラ語は、存在しない。

A系列の非文末形（[1 T]/-F）の語例には、対応する文末形（[1 T]/+F）の語例と異なる部分がある。すなわち、すべて、助詞付きの形となっている。これは、上野善道(1989b)の語例を、そのまま挙げたものである。「助詞のガヤヲを介さずに裸の形で使われることはまず無い」との理由による（上野善道(1989b:左3)参照）。

なお、A系列とB系列の音調の細部(上野善道(1989b:左3)参照)は、定式化の対象としない。

6.2 分 析

A系列の文末形（[1 T]/+F）の基本的な音調パターンは、「高…高昇」である（昇=1モーラ内での低→高）。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの圧縮によって得られる。

A系列の非文末形（[1 T]/-F）の基本的な音調パターンは、「高…高低」である。縮約の適用はない。

B系列（[2 T]）の基本的な音調パターンは、「低高…高低」である。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第1モーラの除去によって得られる。1モーラのパターンは、2モーラのパターンの圧縮によって得られる。

C系列（[3 T]）の基本的な音調パターンは、「高低…低高」である。2モーラのパターンは、3モーラのパターンの第1モーラと第2モーラの圧縮によって得られる。

なお、上野善道(1989b:左3)に、各系列の「ピッチ・パターン」の図示がある。これは、(少なくとも、この中村方言に関する限り)本稿で言う「基本的な音調パターン」と同趣旨のものであると解される。ただし、すでに、§1.2で断ったとおり、「基本的な音調パターン」は、本稿の枠組みにおける正式の概念ではない。

7 伊後方言

7.1 データ

次に、伊後方言（島根県隠岐郡西郷町）を取り上げる。データと、その基本的な捉え方は、上野善道(1989b:左18)の注1による。

素性T, Fの値を、次のように定める。

1 T : A系列, 2 T : B系列, 3 T : C系列,

+F : 文末, -F : 非文末.

データを挙げる。アメ=雨, である。§6 で取り上げた中村方言と異なるのは, C系列 ([3 T]) の音調のみである。A系列 ([1 T]) とB系列 ([2 T]) の音調は, 中村方言と同じである。

[1 T]/+F
 絵 アメ ウサギ ニワトリ ワタシブネ ワタシブネガ
 [1 T]/-F
 エガ アメガ ウサギガ ニワトリガ ワタシブネガ
 [2 T]
 柄 ヤマ ココロ アサガオ リコーモノ リコーモノガ
 [3 T]
 カゼ サカナ カネモチ タカラモノ タカラモノガ

7.2 分析

上述のとおり, 中村方言と異なるのは, C系列 ([3 T]) の音調のみである。よって, C系列のみについて, 述べる。

C系列の基本的な音調パターンは, 「高低…低高低」である。4モーラのパターンは, 5モーラのパターンの第4モーラと第5モーラの圧縮によって得られる。3モーラのパターンは, 4モーラのパターンの第3モーラの除去によって得られる。

2モーラのパターンは, 3モーラのパターンから, 除去・圧縮のいずれでもない操作によって, 導かれる。この種の操作は, 岡田(1991:156)において, 認めた。プログラムの中での扱い方については, 岡田(1992:127)に示した。

この種の操作の適用例は, 現時点でも, 依然として, 少数である。本稿の7つの方言を含め, これまでに扱った20の方言のうち, 岡田(1991)で取り上げた佐柳島方言, 岩黒島方

言、真鍋島本浦方言、及び、この伊後方言に、それぞれ、1件ずつ、適用例が存在するのみである。

8 Schemeによる定式化

最後に、プログラミング言語 Scheme による定式化を示す。

本稿において、枠組みの変更は、行わない。ただし、新たに、関数 `extension?` を定める。定義は、次のとおりである。

```
(define (extension? fv-list1 fv-list2)
  (if (null? fv-list2)
      #t
      (let ((feature (caar fv-list2))
            (value (cadar fv-list2)))
        (if (equal? (val feature fv-list1) value)
            (extension? fv-list1 (cdr fv-list2))
            #f))))
```

この定義に現れる関数 `val` は、岡田(1992:134)で定義し、同(1992:122-123)において、解説を与えた。念のため、繰り返す。関数 `val` は、`(val feature fv-list)` の形で用い、素性構造 `fv-list` における素性 `feature` の値を返す。素性 `feature` の値が指定されていなければ、空リストを返す。

関数 `extension?` は、必要不可欠なものではない。前稿で定めた関数 `equal?` を組み合わせて使えば、同様の結果を得ることができる。事実、前稿では、当然、そのようにしていた。しかし、関数 `extension?` を用いた方が、若干、記述が明解になる。

この関数は、`(extension? fv-list1 fv-list2)` の形で用いる。素性構造 `fv-list1` が素性構造 `fv-list2` の `extension` であるかどうかを判定し、真偽値を返す。

`extension` という概念の定義は、例えば、Gazdar et al.(1985:26-27, 39)にある。ただし、現行の枠組みにおいて、素性構造を値とする素性は、認めていない。したがって、本稿の範囲内において、素性構造 `fv-list1`、`fv-list2` に関し、「`fv-list1` が、`fv-list2` の `extension` である」ということは、「`fv-list2` が、`fv-list1` の部分集合である」ということと、同値である。

関数 `extension?` の定義も、素性構造を値とする素性が存在しないことを、前提としている。これは、前稿の諸関数についても、同様である。

例を挙げる。次のものは、いずれも、真である。


```
(extension? '((tone 2) (acc t) (mark 2) (len 4))
              '((tone 2)))
(extension? '((tone 2) (acc t) (mark 2) (len 4))
              '((acc t) (mark 2)))
```

次のものは、いずれも、偽である。

```
(extension? '((tone 2) (acc t) (mark 2) (len 4))
              '((tone 1)))
(extension? '((tone 2) (acc t) (mark 2) (len 4))
              '((tone 2) (final t)))
```

新たに定義する関数については、以上である。

岡田(1992:126)で述べたとおり、プログラムにおいては、一般的な枠組みの部分と、方言固有の事項を記述する部分とが、明確に分離されている。したがって、本稿で新たに取上げた方言に関する事項は、方言固有の事項を記述している部分の末尾に、単に付け加えればよい。他の部分に手を加える必要はない。すなわち、関数 proc (各方言の特性を定める関数。定義は、岡田(1992:136-154)を参照)の末尾に、プログラムの断片を付け加えることになる。付け加えるべき断片を、以下に示す。

なお、実際には、関数 proc の末尾の括弧の数、及び、付け加える断片の末尾の括弧の数を、調整しなければならない。具体的には、関数 proc の末尾の括弧を、3つ取り去り、断片の末尾に、括弧を3つ加える必要がある。また、実のところ、必ずしも、関数 proc の末尾に、断片を置く必要はない。末尾以外の場所であっても、適切な場所ならば、挿入してよい。末尾以外へ挿入すれば、括弧の数の調整は、不要となる。いずれにしても、括弧の加除は、本質的な事項ではない。

```

;; 白峰方言
((shiramine)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (p11 0 (0 . 1) neg2)
     (p12 0 (1 . 1) pos2)
     (p21 0 (0 . 1) neg)
     (p22 0 (1 . 1) pos)
     (t1 0 (2 . 1) neg2)
     (k 1 (0 . 1) neg)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (if (extension? fv-list '((tone 1)))
        '(t1))
    '(k)
    (if (extension? fv-list '((initial t)))
        (case (val 'tone fv-list)
          ((1) '(p11 p12))
          ((2) '(p21 p22))))))
  ((total-compression) #f)
  ((prohibition) '())
  ((contraction1)
   (cond ((equal? border '(p22 . k))
          (list not-touch?
                delete 'p22))
         (else (list tautology))))
  ((contraction2)
   (cond ((equal? border '(t1 . e2))
          (list not-touch?
                compress 't1))
         (else (list tautology))))
  ((variation) tc-list)
  ((modification) tc-list)
  ((surface-rule)
   (map (lambda (tc)
         (if (and (eq? (segment-comp tc) 'neg2)

```

```

                                (rat-not-integer? (time-comp tc)))
                                (subst-segment 'neg tc)
                                tc))
                                tc-list))))
;; 観音寺方言
((kanonji)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (t21 0 (0 . 1) neg)
     (t22 0 (1 . 1) pos)
     (t1 0 (2 . 1) neg2)
     (k 1 (0 . 1) neg)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (case (val 'tone fv-list)
      ((1) '(t1))
      ((2) '(t21 t22)))
    '(k)))
  ((total-compression) #t)
  ((prohibition) '())
  ((contraction1)
   (cond ((equal? border '(t1 . k))
          (list not-cross?
                delete 'k))
         (else (list tautology))))
  ((contraction2)
   (cond ((equal? border '(t1 . e2))
          (list not-touch?
                delete 't1))
         ((equal? border '(k . e2))
          (list not-touch?
                compress 'k))
         (else (list tautology))))
  ((variation) tc-list)
  ((modification) tc-list)
  ((surface-rule) tc-list)))

```

;; 津幡方言

```

((tsubata)
  (case item
    ((tc-list-init)
      '((e1 0 (0 . 1) e)
        (p1 0 (0 . 1) neg)
        (p2 0 (1 . 1) pos)
        (t1 0 (2 . 1) neg2)
        (k 1 (0 . 1) neg)
        (e2 2 (0 . 1) e)))
    ((make-index-list)
      (append
        (if (extension? fv-list '((tone 1)))
          '(t1))
          '(k)
          '(p1 p2)))
      ((total-compression) #f)
      ((prohibition) '())
      ((contraction1)
        (cond ((equal? border '(p2 . k))
              (list not-touch?
                    delete 'p2))
              (else (list tautology))))
      ((contraction2)
        (cond ((equal? border '(t1 . e2))
              (list not-touch?
                    compress 't1
                    delete 'p2))
              ((and (equal? border '(k . e2))
                    (extension? fv-list '((tone 2))))
              (list not-touch?
                    compress 'k))
              (else (list tautology))))
      ((variation)
        (cond ((extension? fv-list '((tone2 2)))
              (set! tc-list
                    (move '((p2 . (-1 . 1)))
                          tc-list)))
              (else (list tautology))))))

```

```

(set! tc-list
  (case (val 'len fv-list)
    ((1) (move '((t1 . (1 . 2)))
                tc-list))
    ((2) (move '((t1 . (-1 . 2)))
                tc-list))
    ((3) (move '((t1 . (-1 . 1)))
                tc-list))
    (else tc-list)))
  tc-list)
  (else tc-list)))
(modification) tc-list)
(surface-rule) tc-list)))
;; 戸入方言
((tonyuu)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (t11 0 (0 . 1) neg)
     (t12 0 (1 . 1) pos)
     (t21 0 (2 . 1) neg)
     (t22 1 (-1 . 1) pos)
     (k 1 (0 . 1) neg)
     (t23 2 (-1 . 1) pos)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (case (val 'tone fv-list)
      ((1) '(t11 t12))
      ((2) '(t21 t22)))
    '(k)
    (if (extension? fv-list '((tone 2) (acc f)))
        '(t23))))))
  ((total-compression) #f)
  ((prohibition) '())
  ((contraction1) (list tautology))
  ((contraction2)
   (cond ((equal? border '(t21 . t23))

```

```

      (list not-touch?
        delete 't21
        compress 't21))
      (else (list tautology))))
((variation) tc-list)
((modification) tc-list)
((surface-rule) tc-list)))
;; 島別所方言
((shimabessho)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (t11 0 (0 . 1) neg)
     (t21 0 (0 . 1) neg)
     (p21 0 (0 . 1) pos)
     (t12 0 (1 . 1) pos)
     (p22 0 (2 . 1) neg)
     (t22 1 (-1 . 1) pos)
     (k 1 (0 . 1) neg)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (case (val 'tone fv-list)
      ((1) '(t11 t12))
      ((2) '(t21 t22)))
    '(k)
    (if (extension? fv-list '((tone 2) (initial t)))
        '(p21 p22))))
  ((total-compression) #f)
  ((prohibition) '())
  ((contraction1)
   (cond ((equal? border '(t12 . k))
          (list not-touch?
                delete 't12))
         ((equal? border '(p22 . t22))
          (list not-touch?
                delete 'p22
                delete 'k)))

```

```

      (else (list tautology))))
((contraction2)
 (cond ((equal? border '(t12 . e2))
        (list not-touch?
              delete 't12))
       ((and (equal? border '(k . e2))
              (extension? fv-list '((tone 1)))
              (<= (val 'len fv-list) 2))
        (list not-touch?
              compress 'k))
       ((and (equal? border '(p22 . e2))
              (extension? fv-list '((acc f))))
        (list (lambda (ratio)
                (rat>? ratio (integer->rat 1)))
              delete 'p22
              delete 'e2
              compress 'p22))
       (else (list tautology))))
((variation) tc-list)
((modification) tc-list)
((surface-rule) tc-list)))
;; 中村方言
((nakamura)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (t21 0 (0 . 1) neg)
     (t22 0 (1 . 1) pos)
     (t31 0 (1 . 1) neg)
     (t1 2 (-1 . 1) neg)
     (t23 2 (-1 . 1) neg)
     (t32 2 (-1 . 1) pos)
     (p 2 (-1 . 2) pos)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (case (val 'tone fv-list)
      ((1) '(t1))

```

```

      ((2) '(t21 t22 t23))
      ((3) '(t31 t32)))
      (if (extension? fv-list '((tone 1) (final t)))
          '(p))))
      ((total-compression) #t)
      ((prohibition) '())
      ((contraction1) (list tautology))
      ((contraction2)
       (cond ((equal? border '(t22 . t23))
              (list not-touch?
                    delete 't22))
              ((equal? border '(t31 . t32))
              (list not-touch?
                    compress 't31))
              (else (list tautology))))))
      ((variation) tc-list)
      ((modification) tc-list)
      ((surface-rule) tc-list)))
;; 伊後方言
((igo)
 (case item
  ((tc-list-init)
   '((e1 0 (0 . 1) e)
     (t21 0 (0 . 1) neg)
     (t22 0 (1 . 1) pos)
     (t31 0 (1 . 1) neg)
     (t32 2 (-2 . 1) pos)
     (t1 2 (-1 . 1) neg)
     (t23 2 (-1 . 1) neg)
     (t33 2 (-1 . 1) neg)
     (p 2 (-1 . 2) pos)
     (e2 2 (0 . 1) e)))
  ((make-index-list)
   (append
    (case (val 'tone fv-list)
      ((1) '(t1))
      ((2) '(t21 t22 t23))
      ((3) '(t31 t32 t33))))

```



```

      (if (extension? fv-list '((tone 1) (final t)))
          '(p)))
((total-compression) #t)
((prohibition) '())
((contraction1) (list tautology))
((contraction2)
 (cond ((equal? border '(t22 . t23))
        (list not-touch?
              delete 't22))
        ((equal? border '(t31 . t32))
         (list (lambda (ratio)
                (rat>? ratio (integer->rat 1)))
               compress 't33
               delete 't32
               (lambda (index tc-list)
                 (move '((t31 . (-1 . 2))
                        (t32 . (-1 . 1))
                        (t33 . (-1 . 2))
                        (e2 . (-1 . 1)))
                       tc-list))
                 'e2))
         (else (list tautology))))))
((variation) tc-list)
((modification) tc-list)
((surface-rule) tc-list))

```

参 考 文 献

- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古希記念論文集第二卷言語学編』三省堂。347-390.
- 上野善道(1985)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40(3). 215-250.
- 上野善道(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42(1). 15-70.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道(1989a)「アクセント」『国文学解釈と鑑賞』54(1)(昭和64年1月号). 22-30.
- 上野善道(1989b)「隠岐島中村方言のアクセント交替」『国語研究』52. 左1-24.
- 上野善道・新田哲夫(1983)「金沢方言におけるアクセントと語音の関係」『日本海文化』10. 01-043.
- 岡田英俊(1990)「日本語諸方言の音調体系の定式化」『東京大学言語学論集'89』137-176.
- 岡田英俊(1991)「日本語諸方言の音調体系の定式化(2)」『東京大学言語学論集』11. 143-202.
- 岡田英俊(1992)「日本語諸方言の音調体系の定式化(3)」『金沢大学教養部論集人文科学篇』30(1). 113-156.
- 佐藤栄作(1986)「香川県高瀬アクセントについて—三野町大見の体言のアクセントから—」『山手国文論攷』7. 1-25.
- 中井幸比古(1984)「真鍋式アクセントの所属語彙」『言語学研究』3. 81-116.
- 中井幸比古(1990)「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部研究報告』第I部 79. 43-58.
- 新田哲夫(1985)「石川県白峰方言のアクセント体系」『金沢大学文学部論集文学科篇』5. 左97-115.
- 新田哲夫(1988)「加賀北部地域における動詞アクセントの変遷」『日本海文化』14. 01-030.
- 新田哲夫(1990)「能登アクセントの提起するもの」『国語学会平成二年春期大会要旨』81-86.
- 山口幸洋(1984)「岐阜県徳山村戸入方言のアクセント」『日本方言研究会第39回研究発表会発表原稿集』58-66.
- Gazdar, Gerald, E. Klein, G. Pullum and I. Sag (1985) *Generalized Phrase Structure Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.